

別紙 ①

現状では、土層堆積の状況がかわる層理面、1・2・3・4面で遺構検出を行い検出された遺構掘削している。調査区写真図版の白線で示した遺構が、各遺構面で検出された遺構である。各遺構面の主な内容は下記の通りである。

【1面】 江戸時代後半の遺構・遺物が多く見つかった。1788（天明8）年の天明大火後の火災整地層直下で検出された遺構・遺物である。径1～2m程度の円形土坑・方形土坑などが多く、生活に伴う廃棄などが行われていた可能性が高い。伏見宮家屋敷にかかわることが明確な建物痕跡などは確認できなかった。

【2面】 江戸時代前半・後半いずれも含む時期（17～18世紀）の遺構・遺物が多く見つかった。

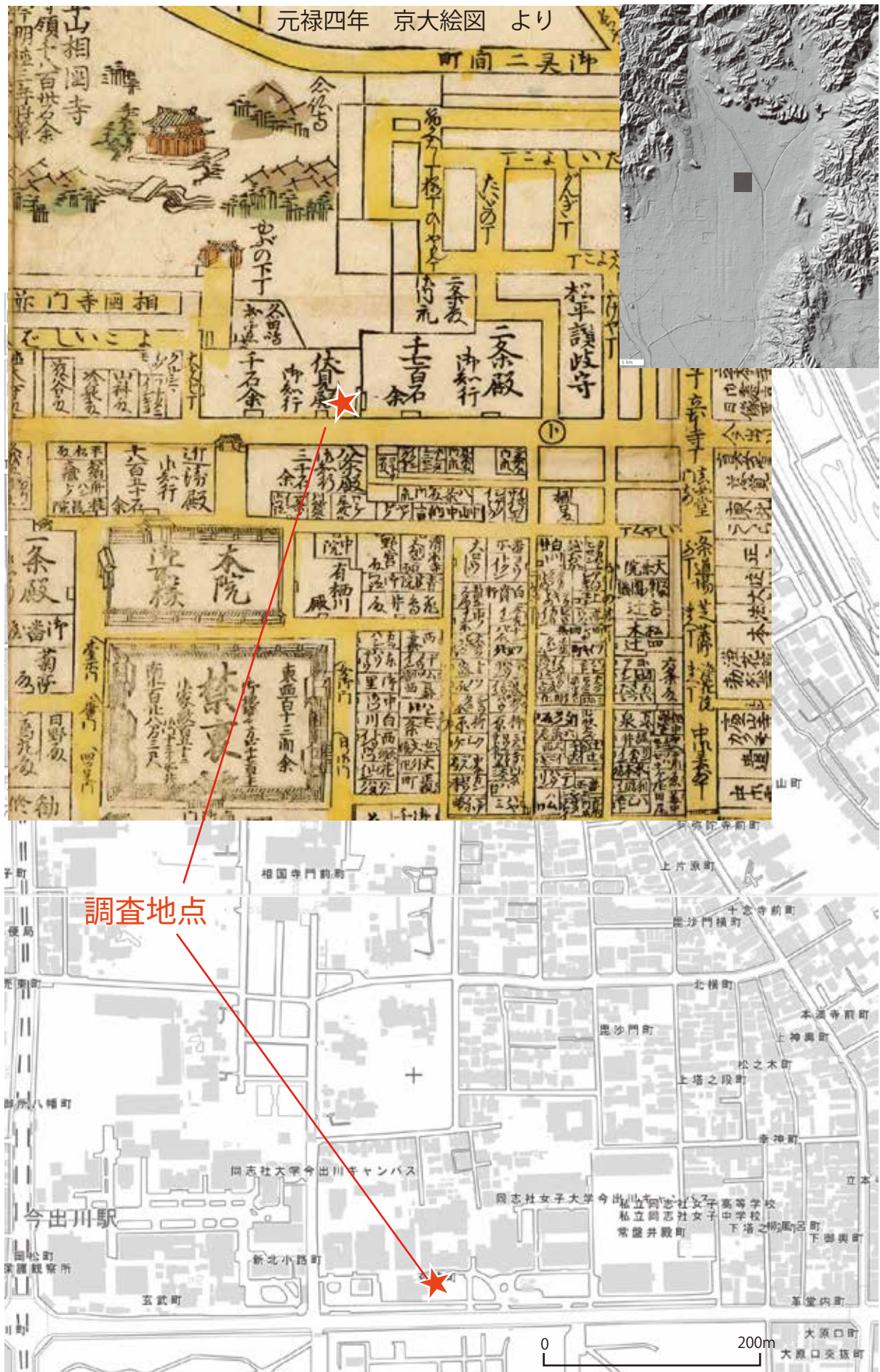
調査区南東端でみつかった径0.5以上規模の円形土坑（SK2039）には多量の土器廃棄がみられた。そこには土師器類とともに、菊文の意匠された磁器類が多数廃棄されていた。これらは「禁裏御用品」といわれ天皇家用の特注の磁器とされるものである。皇族である伏見宮家に天皇家から譲られて使われたことを示している。禁裏御用品磁器とともに多量に出土した土師器片は祭事や宴席などで用いられて一括廃棄されたものとも考えられる。（写真1参照）

また、調査区中央西部には、東西約6m・南北約3mの規模の平面方形土坑（SK2005）の長辺下部に沿って、石組列が2つみつかった。長さ40-70cm大の方形の花崗岩をならべた石列である。一段だけの石列であるが土坑の深さなどから、方形石組の最下部の一部だと考えられる。上部の段と短辺や長辺の一部の石は、石組廃絶後解体され取り去られたと推定できる。実際、石列内側の埋土には石列と同質の花崗岩の破片が多数含まれ、上段部石組の破壊があったことが推定できる。石列の内側は底面が黄色粘土などで叩き締められていて床面が堅牢に構築されていた。形態や構造などから、半地下式の貯蔵庫だったと考えられる。SK2005の例は同様のもののなかではかなり大型で、底面が丁寧に構築されている。宮家邸宅に伴う石室の特徴と言えるかもしれない。（写真2参照）

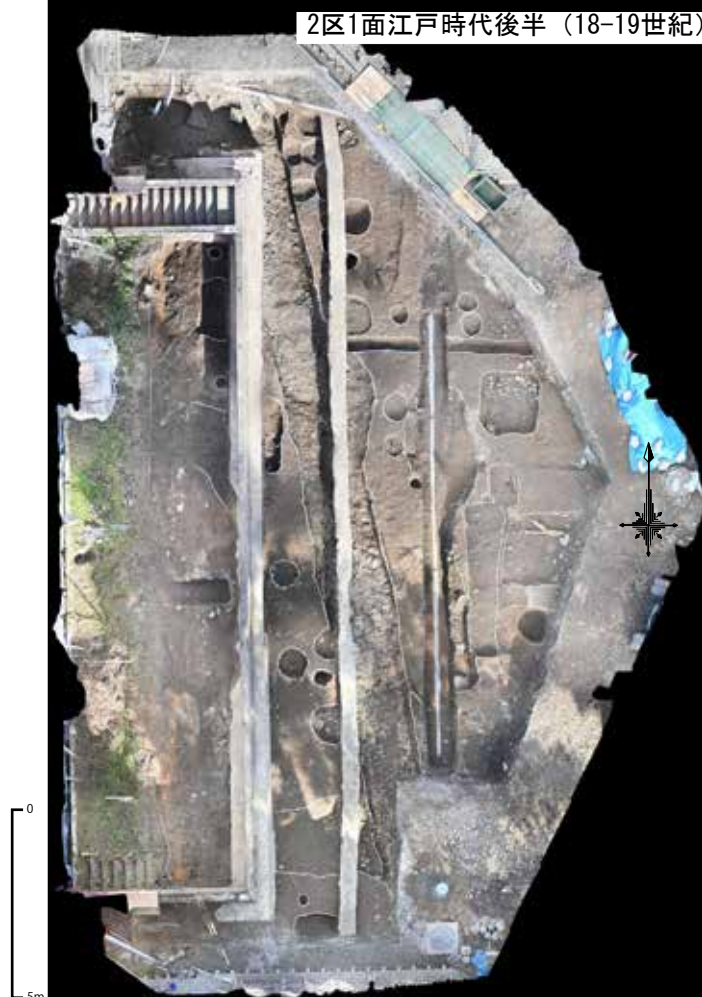
【3面】 安土桃山時代～江戸時代前期（16世紀後葉～17世紀）の遺構・遺物が多く見つかった。調査区北半には、不整円形などの廃棄土坑が多くみられる。一方、調査区南部には、東西方向の溝が2条平行してみつまっている。幅60cmのSD3024は両側に礫を並べていて石組水路だった可能性が高い。その南にあるSD3020は幅約1mで深さ40cmと浅く、これも小規模な溝と考えられる。2条は同時存在していたとは確認できないが、伏見宮家屋敷内の水路や区画溝の可能性はある。建物周囲の溝とすると、今出川通りから約15mの位置に、建物があつたとも推測できる。

【4面】 室町時代後期～安土桃山時代（16世紀）の遺構・遺物が多く見つかった。調査区北半には、不整円形・方形の土坑が直線上に複数あって、柱跡の可能性はある。調査区南部に南北方向大溝の可能性のある遺構（SD4055）が検出されている。現在検出掘作業中であり、現地説明会の際には形態や形成時期が明らかになるだろう。安土桃山時代以前に形成されたとすれば、伏見宮家以前の遺構ということになり、相国寺旧境内周辺の施設と考えねばならない。

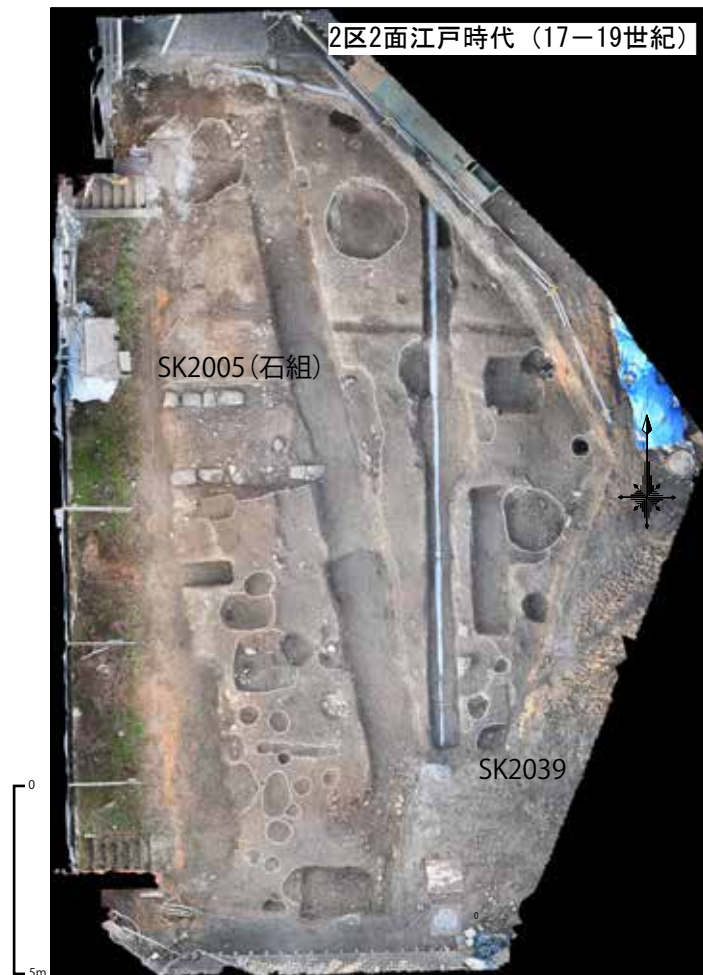
別紙 ②



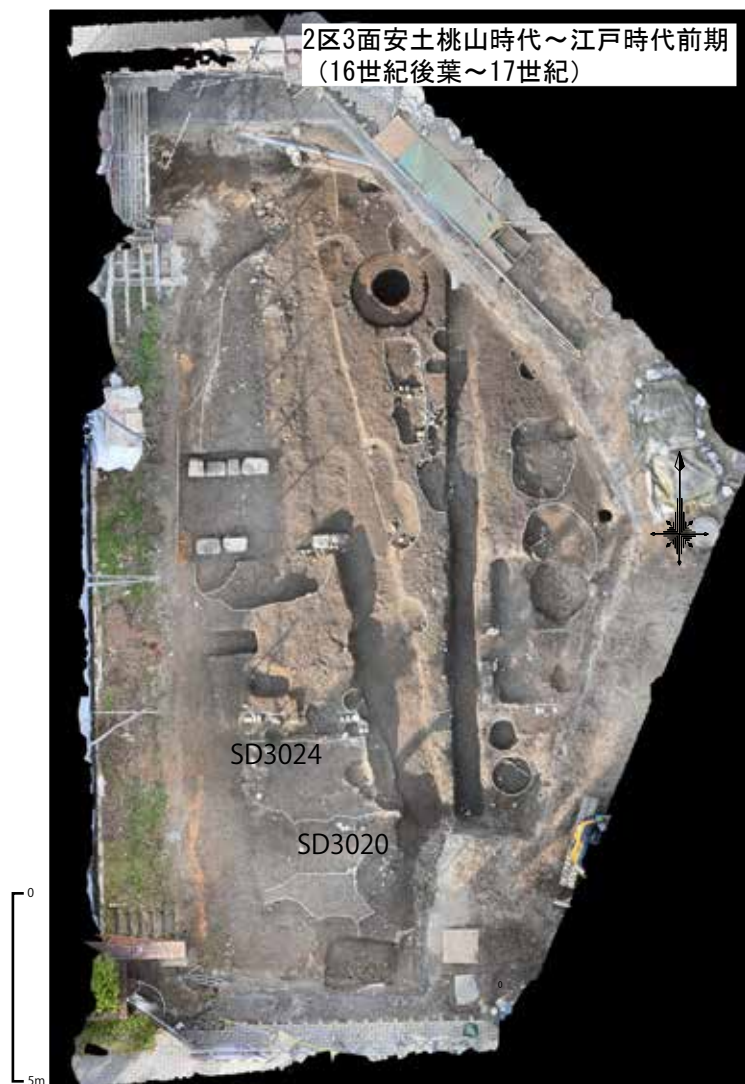
2区1面江戸時代後半(18-19世紀)



2区2面江戸時代(17-19世紀)



2区3面安土桃山時代～江戸時代前期
(16世紀後葉～17世紀)



2区4面室町時代後期～安土桃山時代
(16世紀)

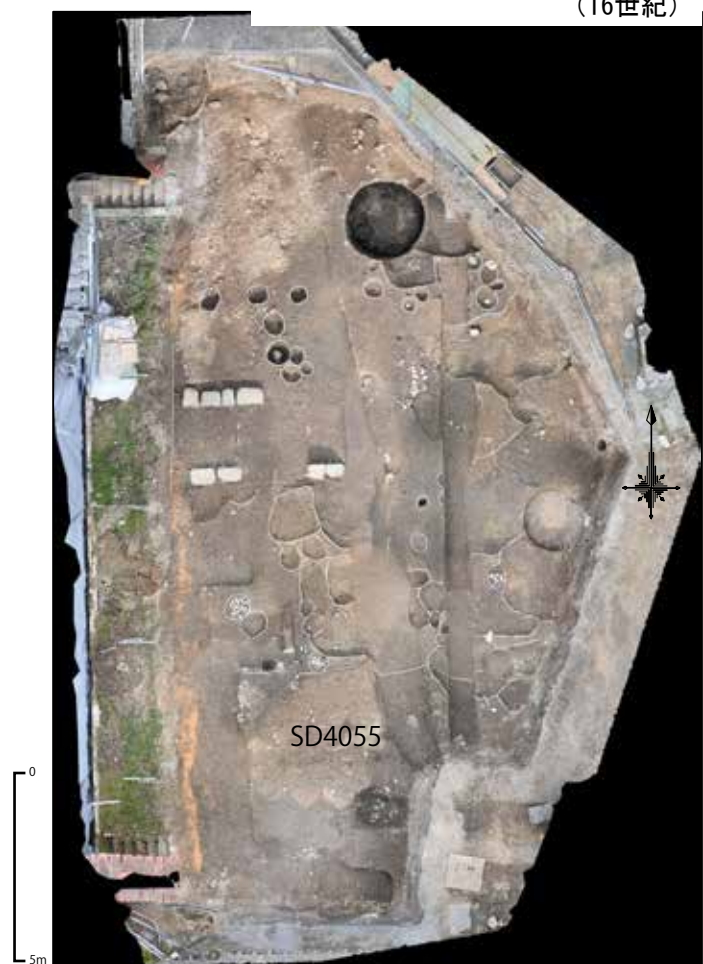




写真 1 (SK2039 出土土師器皿・禁裏御用品磁器)



写真 2 SK2005 石組